

英語科編 1/2

第1/2号

平成21年11月25日

20 不明・非常勤講師か？

岩脇 完爾 三重県出身 東高師明45卒 在職大1く大3 学習院教授

岩崎完爾については、三重県出身であること、東京高等師範を明治45年に卒業したこと以外、不明です。昭和42年度の「桐陰会名簿」の教官欄を見ても名前がありません。専任ではなくて、非常勤であった可能性があります。ただ、昭和2年の「東京高等師範学校一覽」では、学習院教授になっています。今後の調査が必要な教官です。

21 「書物が私のために考えてくれる」 文化功労賞受賞者

福原麟太郎 広島県出身 大6東高師卒 在職大7く大11 東京教育大教授

「書物が私のために考えてくれる」という言葉は、福原麟太郎が著した名著『チャールズ・ラム伝』(垂木書房・1963)の中に出てくる言葉ですが、その書物を、英文学だけでなく、あらゆる分野にわたって多読し、また、数々の名エッセイを著して、文化功労者選ばれたのは、その福原麟太郎です。

福原は、東高師を卒業すると、静岡中学に赴任しますが、わずか1年で附属中へと転勤してきました。転勤のきっかけとなったのは、当時の高師の峰岸米造(歴史学の教授)生徒監が静岡中を視察したおりに目にとまったことです。そして、もちろん、よほど福原の将来を囑望されたことだとは思いますが、ここで、彼はいわゆる天才型の人間ではなく、鈍才型の人間であり、努力型の人間であるといわれています。それを表すようなエピソードがいくつが残っています。まず、青木常雄の思い出によれば次のようなことがあります。「福原君は、高師の生徒のころ、発音など一生懸命に勉強した。「入学直時は、先生をシエンシエ」と言ったが、半年後には、ちゃんと言えるようになった。・発音を正しくしようと熱意の顯われと言つてよい。Jonesの発音辞典などもよく引いた。・福原君の高師の生徒時代のノートを見たことがある。全巻にわたつて例

のきれいな字で書いてあり、これは作文熱心な福原君の一面である」(青木常雄著『教壇生活の思い出』修文館昭和45)と記しています。また、福原自身の思い出や言葉には、次のようなものもあります。それは、静岡中学に赴任したときに、初めて背広を着て、その時にネクタイをチヨッキの外へ出すべきか、中へつっこむべきかわからず、英語の教科書に背広姿の男の絵がないかどうか探したことや、彼自身の言葉として、

「遅々たることにおいては、決して人後に落ちない」等にも見られます。ところで、英語教官としての福原は、岡倉由二郎を囲む若い英学者の集まりであった洋々塾の一員として活躍し、その技量を磨きました。その中学校での授業の詳細は分かりませんが、大正時代に大きな影響を与えたパーマー(次号に掲載予定)のやり方には批判的でした。それを示すものとして、次のような福原の大学生に対する言葉があります。

「大学生は、英語を話したり書いたりすることは、考えないで、文法だけ勉強すればよい。・・・時には、喋るのは、むしろ下手な方がいい。」

もちろん、福原は、昭和4年にイギリスに留学していますから、英会話も十分であったことは間違いなくその言葉は、大学入学前に speakingや writingなどはすべて完璧にできるようにならなければ、ということの上の言葉である、と言えないことありませんが、ただ、このような福原ですが、彼自身は、当時の中学生に対する授業をするとき「文法を教える時は、わたくしは文法について知識がないものですから、わたくしの理解し得たように教える以外のことはできない。誰かの本を使って教えるより、自分の理解のとどこかない所があつて、ちくちくになるかしれないと心配して、その頃最も有名であった文法書、クルイシンの「文法ハンドブック」というのを家で読んで、その体系に従つて中学生に必要な文法的知識を拾つて、それをわたしの帳面へ書いていつて口述するつもりやりをいたしました。・意識的に英語の組み立てを覚えるといつては、耳と口で聞いて喋つて覚えるといつては、両立させた

」と考へていたようです。

そのような福原の授業について、授業の内容でなく、生徒とのやりとりを、山路誠(32回)が記しています。

「アタ名は余り有名ではないが、附属の教師にしてはめずらしい存在の福原麟太郎先生が我々のクラスを五年間ずっと英語をみて下さつた。先生については、一寸した出来事があつた。それは先生の来場がおそかつた時に窓際のカーテンの紐で入口のドアの把手をしばらく、先生を入れなかつたため、その日の授業が出来ずに終わった。その下手人は私と他に誰か二名程で、これは素直に謝つて大事にいたらなかつた。後日(後年のこと・山口)、同級生の嘉治真三君と二人で先生の自宅を訪問して、この話をして笑つたことがあつた。先生は、若気の至り、生徒は素直な行きの過ぎで事は納まつた。福原さんが他の先生と一味違つた先生であることを知つたのは、中学校卒業後であつて、その隨筆「われ愚人を愛す」等を買つて読んだりしたのであつた。」

大正10年に、助教教授となつた福原は、附属中学の教官を辞めますが、『英文学の輪郭』をはじめとして、次々に英文学についての研究を発表するとともに、戦後は、『この世に生きること』などの名隨筆を著し、名実ともに大隨筆家となつていきました。そして、昭和30年、東京教育大学を退官すると、共立女子大学などで教鞭をとり、昭和43年、文化功労者選ばれました。

なお、福原麟太郎監修『ある英文教室の100年』(天修館1978)は、東京高等師範・東京文理科大・東京教育大学の英語科の歴史をまとめたものであるだけでなく、日本の英語教育の歴史もたどれる著書です。今回の英語科教官伝もこれを参考に記しているところが多々あります。

福原麟太郎については、『福原麟太郎著作集 全1の巻』が研究社から、また、『福原麟太郎随想全集 全8巻』が福武書店から出ています。さらに、新潮選書から単著『読書と或る人生』などもあります。左は、附属中の教官も何人かが著者となっている研究社版の『英米文学社伝叢書』の一冊です。

